

研究生生活40年

ODAKA, Konosuke / 尾高, 煌之助

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

73

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

581

(終了ページ / End Page)

598

(発行年 / Year)

2006-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005694>

研究生生活40年

尾高煌之助

I

大学入学までの段階で、知的な面でその後に及ぶ大きな影響を受けた人物が二人ある。和辻哲郎と鈴木正久である。前者は、その著作の大半を手当たり次第に（わかってもわからなくても）読み漁ったので、用語や文体にも多少の影響を受けているのではないかと思う¹⁾。後者は、高校を卒業後の浪人時代に、近隣の教会を訪れて知己を得たプロテスタントの牧師で、世界観の形成に計り知れぬ影響を受けた。後年、米国に留学した際には何通かの手紙をやりとりしたが、離れていても互いの考えが「ツーカー」と響きあうのには改めてびっくりした。

社会科学に対する関心がそそられた確立したのは、成蹊高校で船越経三先生に「一般社会」を習ってからである²⁾。アダム・スミスの研究家でもられる先生が、近現代社会の仕組みや思想的背景などを情熱をこめて語られるのを丹念にノートをとりながら熱心に聴き、裨益されたところは大きかった。

当時の成蹊高校のクラス編成は、大学受験対策の一環として、文系コースと理系コースとに分かれていた。選択に際し、自分が文系であることを十分承知しながらあえて理系のクラスを選んだのは、不得意の分野を伸ばしたいという純粋な動機からというよりも、それが受験にとって有利ではないかというあいまいな計算があったのと、理系の方が文系よりも「カッコいい」と感じたからだった³⁾。とはいっても、物理や化学の授業は遂に最後まで十分に理解出来ず、そうかといってそれらの理解度を深める努力を払うわけでもなかった。けれども、地学と生物には興味を湧いた。とくに生物は、発生学を中心とする加藤淑裕先生の授業が面白かった。熱情家の先生は、当時早くも高校生に DNA の理論を叩き込む勉強家で、学生の中に絶大な人気があった⁴⁾。

-
- 1) その蔵書が、和辻文庫として現在の職場（法政大学）の図書館に取められているのも、何かの縁であろう。
 - 2) 先生は東京商科大学出身だが、卒業前に当局から不当な拘束を受けられたのを当時の上田貞次郎学長の尽力で解放された苦い経験をもっておられ、おそらくそのためだろう、日本社会に対してやや斜かけの見方をもっておられた。ちなみに、先生の大学卒論は、現在でも一橋大学図書館に保管されている。
 - 3) もっとも、ふたを開けてみると、後年文系に進んだ人たちで理系コースに属した人は少なくなかったようだ。

特記すべきは、落ちこぼれ寸前だった英語の学力を取り返すべく、まず標準の受験参考書を紹介して貰ってこれを読破したあと、電車通学中は英単語暗記に精を出し、さらに知人でお茶の水女子大助教授だった伊吹知勢女史にお願いして英書購読の特訓を長期間に亘って（しかも無料で！）受けたことである⁵⁾。女史の専門が英国近代の文学（ジェーン・オースティンやヴァージニア・ウルフなど）だったところから、読んだのは大抵マシュー・アーノルドやT・S・エリオットなど文化評論で、近代英国のノンコンフォーミストのことなどをわけもわからずに「読みかじった」。それでも、英語力の進歩はこのレッスンに負うところが大きかった（ただし、受験対策になったかどうかは不明である）。随分あとに、たぶん留学後のことだったと思うが、女史の葉書に「あなたも英語らしい英語を書くようになった」とあったときには嬉しかった。

このほか高校時代には、担任の高橋和夫先生をリーダーにクラスメートらと源氏物語（若紫）を読んだり、選択でドイツ語を岩崎英二郎先生に習ったり、友人たちと共同で先生たちに願って英語や数学の特訓を受けたり、同好グループの学園祭上演の音楽係をつとめたり、充実した毎日で結構楽しかった。（その代わり受験勉強には身が入らず、一年の浪人生活を余儀なくされた。）

II

慶大には補欠で入った。この学校に入るのなら経済学部だと思ったのが経済を選んだ理由だったけれども、大学の4年間に経済学で学んだことはさほど多くない。在学中に仕入れた現代経済学的知識の大部分は鈴木諒一先生の経済原論に負っている。先生の講義は経済常識に毛が生えた程度のもので、体系だつてよく整理されてはいたが百科事典的で、これを軸に経済問題を自分で考える訓練ではな

4) その後先生は米国へ留学された。後年、三菱化成生命研究所で偶然お眼にかかったことがあるが、比較的早く夭折された。

5) 特訓のあとでは、同じ大塚女子アパートに住まわれる川井清先生（三輪田女子高の国語教諭）のところで夕食を一緒に頂くこともしばしばだった。これが機縁になって、伊吹・川井両女史が入っておられた喜多流の能楽会や仕舞稽古会に出かけたりもした。川井先生のご紹介で、先生の同僚の数学の先生に数学力がつくためのアドバイスを願ったこともある。「あなたはよく分かっていると思いますよ」との診断だったが、数学の成績はその後あまり改善しなかった。

かった。独学で熊谷尚夫氏の『資本主義経済と雇傭』や『近代経済学』を繰り返し読んでかなり会得するところがあったけれども、完璧ではなかった。いまから考えると、中級の経済学の考え方を丁寧に身に付けるコースがあれば後でずいぶん違っただろう。

ゼミは、藤林敬三先生のゼミに入った。当時の先生は炭礦労使の仲裁などで多忙をきわめ、講義とゼミを休まれることはなかったけれども、懇切な指導をする余裕は持っておられなかった⁶⁾、自主的な研究会や読書会をやることが多かった。その頃盛んだった社会政策論争の一端に触れたのはその結果だった。しかし、政策のイデオロギー的意味を延々繰り返し論じても得るところは少なく、そんな学会には入りたくないと思った。それよりも、労働の実態を観察する著作が気に入った。東大の『経済学論集』に掲載された隅谷三喜男氏の賃労働史論を、三田の図書館で一所懸命読んだのが新鮮な印象として残っている。

知的に眼が開かれたのは、サブゼミで井村喜代子先生の指導による『資本論』の読書会をやったときである。全巻を読破したわけではなかったが、剰余価値論のエッセンスを知って「ああそうか」と思ってからは、(それまで漠然と感じていた)マルクス主義への恐れが消えてなくなった。

点が辛いので学生に有名な「三村」(野村兼太郎、高村象平、峯村光郎)三教授の講義は皆勤で聴いてAを獲得した。そのほかにも、小池基之先生の農業経済論、大塚金之助先生の学説史などにも興味をもったが、いずれも面白かったというだけでそれ以上深く入ることはしなかった(もっとも労働法は、社会法と市民法との接点という観点から関心をもち、多少エキストラの読書をした)⁷⁾。

エキストラといえば、教養課程の頃、第三外国語にロシア語をとった。最初は十数人の仲間がいたのに、「ロシア語をやったという就職のときに不利になるから」と言って段々やめてゆき、遂に一人だけになってしまった。それでも講師の井桁貞敏先生は毎週(水曜日だったと思う)必ずお見えになるので、懸命に予習して差し向かいでレッスンを受けた。講読につかえると、「え? どうして分

6) 藤林先生の学期末試験の問題は、「貧困について」だった。

7) 野村先生の講義は隔年に繰り返される日本経済思想史で、その学期末試験の監督には(ちょうどその頃留学から帰国された)速水 融氏が来られた姿を覚えている。大塚先生の学期末テストには「先生のルター解釈は間違っている」と書いたが、Aの評点を頂戴した。

からない?」と仰った。この経験で、(アルバイトの翻訳などで稼いだ)授業料をだいぶ取り返せたと思っていたが、ロシア語の能力は、その後使わないので惜しいことにほとんど発散してしまった。

これ以外にも、当時友人たちとずいぶんドイツ語で読書したのに、その痕跡はあとかたもなく消滅してしまったようだ⁸⁾。あとに残ったものといえば、東大社会科学部の富永健一氏には何回か日本アルプスに連れて行って頂いたので、経済社会学に強い関心をもっておられた同氏の知的感化はあったかもしれない⁹⁾。

Ⅲ

カリフォルニア大学(バークレイ)の大学院には、偶然的なきっかけで入学した。その折、経済学科以外の選択はまったく念頭になかったが、もしかすると違った分野に挑戦した方がよかったのかもしれない。必要な学費は、労使関係研究所(Institute of Industrial Relations)の研究助手に雇われてヘンリー・ロフスキー先生の手伝い役になったのでなんとかなった¹⁰⁾。先生には、仕事の必要上、経済分析のための統計データを探索・加工する訓練を受けた。図書資料を丹念に探し回って目録を作る作業もやったので、図書館の利用法も覚えた。

アメリカの大学院は、学部時代の専攻を問わない前提で教育するので、始めは経済学の素養がゼロでも構わない。そのかわり短期間に水準が急上昇するので、その間にわからぬことは質問攻めにして解決しておかないと大変である。最初はもちろん英語が大変だったが、経済学のための数学入門などでどうにか点を稼いでロフスキー先生を感心させた。しかし教室で声をあげる勇気が十分ないため、学友から置いてけぼりにされがちな感はある。

理論ではハーヴェイ・ライベンスタイン教授から価格の意味について、またフランク・ハーン氏からマクロ経済学的に考えるスタンスについて教わった。錚々

8) マックス・ヴェーバーの社会経済史論集(の一部)やカール・バルトの信仰告白釈義など。

9) 知的刺激という点では高橋徹氏からも多くを得た(エーリッヒ・フロムなどの名前を知ったのはそのためだった)。だが、同氏のような知的な空中飛行はとても真似が出来ないと感じた。富永氏の真似ならなんとか出来ると思ったところがあったのかもしれない。

10) 当時は比較的鷹揚だったと見え、大学が支払う研究助手の報酬ですべてを賄えた。

たる看板教授のティボー・シトフスキー氏やジェラルド・ドブリュー氏からも習ったが、吸収出来たところは（とくに後者からは）多くなかった。経済史の講義はトピックスの設定がなにやら恣意的で必読文献ばかり多く、時々話題はそれぞれに面白くても基礎的な訓練となったかどうか疑わしい。

一方、労働経済学を専攻するのは自分のなかで既定の事実だったから、これと関係のあるロイド・アルマン、ワルター・ギャレンソン、アーサー・ロス等の諸教授による講義やセミナーには欠かさず参加した。そこで感じたのは、戦後のアメリカで労使関係が大きな知的関心と呼んだ時期は過ぎようとしており、労働経済学はいまや二流どころの専攻分野らしいということだった。あえて労働関係のホットな話題を探すとすれば、インフレ抑制のための所得政策があるくらいのものであった。

パークレイでの学生生活はおそらく永すぎた。永引いたひとつの理由は、博士課程の修了試験が中々の難関（とくに最初の頃に必須だった経済史）で、及第比率も低かったために院生たちが戦々恐々としていたことにあった。

それはともあれ、大学院生時代に新しい視野が二つ開けた。そのひとつは、ロソフスキー先生の許に大川一司先生が見え、共同研究のため約一年間滞在されたことである。その間、大川先生の助手も務めたので、同先生から基礎資料の扱い方を習い、また先生の社会経済ヴィジョンを伺う機会を得た。

いまひとつは、統計学の手ほどきを得たことである。その直接のきっかけは、サウル・ハイマンズ氏の統計学入門の教務助手を務めたことだった。同氏は助手がその全講義を聴くことを要求したので、毎週二回一時間ずつ、同氏の明快な講義を聴いた。助手はその内容を消化したうえで学生の面倒を見る役目だった。おかげで、初等確率論に始まりフィッシャーからペイズに至る統計学の基礎は十分に伝授して貰った。同時に、計量経済学入門は、まだ新米で意欲一杯のデール・ジョルゲンソン先生から習ったが、せっかく覚えた手法をいま一步修めたいという欲が出て、統計学部の分散分析の単位もとることにした。統計学の基礎は、その入門を教える先生の教え方とそこで使われる教科書とが勝負だという感を強くするとともに、近代統計学は社会科学の補助学問として強力な右腕であることを知った。

IV

パークレイで大川一司先生の仕事のお手伝いをしたのが（当時は意識しなかったが）、その後の歩みを決める足がかりとなった。当時の一橋大学経済研究所長だった都留重人先生が、助手にならないかと声をかけてくださったからである。こうして新しく作られた同所の国際経済機構研究部門に参加する道が開けた。

都留先生がどういう業績をあげられた方なのかは、助手になって初めて認識したような状態だった。研究所には雑用も多かったが¹¹⁾、分野やスタイルを問わず自由に振舞えた。自分の属する部門の看板は殆ど気にせず、労働を中心とする日本経済の数量分析に励んだ。もっとも大きな影響を受けたのは、大川、梅村又次、篠原三代平の諸先生だったが、その周囲におられる中堅から若手のスタッフを初め大川先生の研究会（あるいは大川先生をリーダーとする共同研究プロジェクト）での報告者や出席者の方々からも大きな刺激を受けた¹²⁾。大川先生には実証分析の背後にあるヴィジョンや構想力を、梅村先生には統計データの資料批判と利用法を、藤野先生を初めとする中堅のスタッフからは経済理論にもとづく観察データの解析方法を学んだ。また学外では、当時定期的に開催されていた逗子コンファレンスや六甲コンファレンスへの参加は、研究視角を広げ、さらに同好の士を知る貴重な機会を与えてくれた。

この頃、短期間だが四ツ谷にあった善隣書院に通って中国語を習得しようとい試みたことがある。すばらしい先生がおられ、語学の教師には文学専攻よりも言語学専攻のほうが向いているのではないかと感じた。その後、大学で同僚の木山英雄先生の講義に顔を出したしでしたが、他事に追われるようになって永くは続かなかった。

1972年から約2年間、ハーヴァード大学東アジア研究センター所員としてケンブリッジに滞在した。この期間に、アメリカ東海岸の日本研究者（ジャパノロジ

11) もっとも、現役時代の都留先生から雑用が降りてくることはほとんどなかった。

12) たとえば、藤野正三郎、溝口敏行、南亮進、小野旭、石弘光、山澤逸平、寺西重郎、清川雪彦、松田芳郎の諸氏。さらには高松信清氏のデータ解析。

スト)たちと知り合った。とくにしばしば薫陶を受けたのは、ロソフスキー、ヒュー・パトリック、ジェイムス・ナカムラ、佐藤和夫らの諸氏だったが、ここに集う中堅どころや若者たちの議論を聴いたのも有益だった。滞在二年目には経済学部講師として(ロソフスキー先生のかわりに)現代日本経済史の講義を担当したので、これもいい勉強になった。ケンブリッジ滞在中に、本山幸彦先生をはじめ、石川経夫、猪木武徳、浜田宏一、石井紫郎、熊倉功夫等の日本人研究者たちと友誼を結んだのは、その後の知的財産になった。

大川先生の次に研究者としてのあり方に大きな影響を受けたのは、石川 滋先生である。石川、清川の両氏とは大学院ゼミを共同運営したので、その機会に両氏から(そしてもちろん学生からも)たくさんのことを吸収した¹³⁾。とりわけ石川先生は、経済発展に対する眼を開いてくださっただけでなく、アジア労働力研究会議(Council for Asian Manpower Studies, 略称 CAMS)の理事会メンバーに誘ってくださったので、1977年から1983年まで、東南アジアの若手研究者たちと接触を保ち、共同研究を推進したり自分でもプロジェクト運営に携わるチャンスが生まれた¹⁴⁾。大学を退かれてからの大川先生も、国際開発センター(International Development Center of Japan, IDCJ)で「(日本との)比較」共同研究(俗称 CA (comparative analysis) プロジェクト)を組織されたので、そこで知りあった多くの開発論研究者からたくさんの方の知的訓練を受けた。とくに、速水佑次郎氏とそのグループとが発展途上社会でも経済合理性が貫かれている「事実」を実証的に示されるのには、驚きと同時に留意したい気持ちを味わった。

1970年代半ばには、学者集団として(主としてマクロ経済の)政策提言をとりまとめるグループ「政策構想フォーラム」にも、現代マクロ経済政策のエッセンスを学びたいと思って参加した¹⁵⁾。時子山ひろみ氏から「男の井戸端会議」と評

13) 清川氏からは、実証研究の方法論からその実際までたくさんの教示を受けた。ハッキリした自分独自の見解をもつ同氏にはいつも脱帽の感があり、共同研究者としても頼もしかった。

もっとも共同ゼミの運営は、独力で若手研究者の養成にエネルギーを投入する努力を欠くマイナス面も生んだように思う。

14) この活動は、(小野桂之介、足立文彦両氏の協力を得て)東南ならびに東アジアの下請制機械工業研究(Ancillary Firm Development in Asia, 略称 AFDA)に結実した。その対象は、工業自動車部品メーカーだった。

されたこのグループは、毎年マクロ経済政策提言を発表し、その下準備のため、有志の企業家との頻繁な意見交流会や研究報告会をしばしば開催した。積極的な貢献は出来なかったが、村上泰亮氏をリーダーとする新鋭の社会学者たちの考えを知り、民間経済人や（たまには）政治家の思想動向を知る貴重な経験ではあった¹⁵⁾。

東南アジアとつながりが出来てからはハリー・オオシマ先生と懇意になり、1980年には、国際交流基金のプログラムの一環としてその頃フィリピン大学経済学院が開講していた日本経済担当の客員教授に招かれた。約13ヶ月、昔ロックフェラー財団が大学構内に建てた平屋に住み、東南アジアを肌で知った。経済学院には、学部長ホセ・エンカナシオン氏（愛称ペペ）のリーダーシップの下に集う優秀な若手エコノミストたちが醸し出す熱気があった。異邦人としてではなく仲間の一員として扱われ、違和感がまったくなかったのも嬉しかった。

国立時代のいまひとつの新しい芽生えとして、実証経済学と日本経済史との橋渡しをする数量経済史（Quantitative Economic History, 略称 QEH）研究会の同人に参加した。その仲間は、梅村、新保 博、速水 融、西川俊作の諸先生のほかに、安場保吉、山本有造、宮本又郎、阿部武司、斎藤 修の諸氏、アドヴァイザー格は中村隆英先生で、科学研究費補助金を資源に隔年のインターカレッジ研究集会を開催し、その成果を論文集 4 巻に刊行した。そのうち、同人としての体系的な近代日本経済史を書こうという機運が醸成され、それが中村先生を編集同人に迎えた岩波日本経済史（8 巻）に結実した。このシリーズは論文集で、完全に統一された視点でまとめられた書物ではないが、それでも共通のヴィジョンと方法論とを共有した執筆を心がけ、草稿検討会も数回開催した¹⁷⁾。QEH 研究会は、日本経済史研究に新風を送り込んだと考えられる。

QEH のメンバーのうちからとくに大きな影響を受けたのは、中村、西川の両先生以外では山本、斎藤の両氏である。とくに職場が同じくする斎藤氏とは、大学院の共同講義（1998年春の「比較経済発展論」など）を開講して楽しかった。

15) たしか、今井賢一先生のお誘いによる。

16) 当時はまだ「キャンパス闘争」華やかな時期だったので、一橋大学経済研究所長に就任したのを機会に、政策構想フォーラムからは身を退いた。

17) 遅ればせながら、オックスフォード大学出版局から英語版（圧縮版 4 巻）の刊行企画が現在進行中。

1980年代の終わりには、ボン大学日本研究学科に業務フリーで三ヶ月ほど滞在してドイツの職人養成システムの聞きとりを試み、その際マティアス・パウアーさんにお世話になったことがある。ドナルド・キーン氏が一日だけ同大学に立ち寄られ、大学院生を前に「日本はすばらしい、最高の研究対象です」という趣旨の絶賛の言葉を吐かれたのは衝撃的だったし、時間が遅くて閉館後のベトーヴェン・ハウスの前で最敬礼されたのも印象的であった。なおこの期間中は、大学院生を雇ってドイツ語の特訓を受けていたが、全然ドイツ語を知らない（後から来た）妻の方が相手の趣旨をよくキャッチするので驚かされた。

石 弘光氏の推薦で、ミラノのボッコロニ大学に数週間滞在して日本経済論の短期集中講義をやったこともあった（1997年）。沢山の聴講生が来たが、がやがやと騒がしかった。でも、開放的なイタリア社会はおおいに気に入った。

一橋大学経済研究所長の任期が終ったときには、キャンベラのオーストラリア国立大学へ独りで三週間ほど出かけた。ここには、フィリピンで同僚だったハル・ヒル氏がおられたからである。たまたまロナルド・P・ドーアさんご夫妻と同宿になり、地球の果てで再会という感じがした。ドーアさんが、当時厳しい批判にさらされていた日本的経営擁護論を公開講演会で展開され、その勇氣に感銘を受けたものだ。

学外での研究活動のうちで大きな残響効果があったのは、通産省中小企業庁におられた松島 茂氏のお誘いで始めた下請制工業研究会、その続編としての機振法研究会と中小企業研究会などである。橋本寿朗氏、御厨 貴氏などの学者のほか中央官庁の若手諸氏を動員した定期的な研究会には、実業界の先達や通産省OBをお招きしたり、工場現場を訪問したりして実態分析や過去の政策効果の評価などを試みた¹⁸⁾。

労働経済の分野で国立での最後の共同研究は、都留 康氏との共同研究、「デジタル化時代の組織革新」である。この小プロジェクトは、国際交流基金（日米センター）の支援を得て実施したもので、米国側の協力者にカリフォルニア大学ビジネス・スクール（パークレイ）のジェイムス・リンカーン氏を頼み、同じキャ

18) お招きした方々の研究会報告のうちには、速記録が残されたものもある。

ンパスの経済学部、社会学部、ビジネス・スクール、そして労使関係研究所などの関係者諸氏をも討論者に動員した二回の国際研究集会を経て、論文集にまとめられた。この研究までは、デジタル化は自分とまったく無縁の研究対象だと思っていたが¹⁹⁾、案に相違して従来の市場理論（とりわけスミス流の分業と協業の理論）が応用できる側面も少なくないことを知ったのが収穫だった。この理解に達する過程で、日本側の共著者のひとり、中馬宏之氏からはとくに多くの示唆を受けた。

国立での活動の締めくくりにあたるのが大型共同研究プロジェクト、「アジア長期経済統計データベースの作成」²⁰⁾だった。この研究の雛型となったのは、大川先生らのまとめられた日本の長期経済統計である²¹⁾。総勢約百余人の全国各地と海外の研究者に協力して頂き、約一世紀に亘るマクロ経済史統計のデータベースを、できるだけ統一的な概念枠組みのもとに加工・編纂し、学界の知的共有財産として公開するのがその目的で、4年間にわたって推進した。プロジェクトが網羅する地域はアジアを中心とする諸国で²²⁾、その遂行には困難が多く、目的が野心的なだけに予定の期間中に最終成果の公刊にこぎつくのは無理だったから、本格的な成果の公刊は次世代の大型プロジェクト「21世紀COE」に引き継いで貰い、今日に至っている²³⁾。この大型プロジェクトのおかげで、各国経済（史）の専門家にお会いしたり、それらの地域に関するの経済史統計の探索やその統合方法について学ぶなど、「門前の小僧習わぬ経を読む」ところは甚大だった。

V

法政大学に籍をおいた7年間の最大の収穫は、新しい同僚を知ったことにある。豊富な教示を受けることが多かったし、自由で平等、しかもフェアネスを尊

19) 自分で無縁だと思っていたほどであるから、この書物を受取った友人の一人が「えっ、あの人がデジタル？」という反応をしたのも無理はない。

20) いわゆるCOE (Center of Excellence) プロジェクトの初回にあたる。

21) 俗称LTES (Long-term Economic Statistics of Japan since 1868) 14巻、東洋経済新報社刊。

22) 日本、中国、台湾、韓国、フィリピン、インドネシア、タイ、インド、パキスタン、エジプト、トルコ、中央アジア、そしてロシア。

23) その成果の第一冊（台湾）は、東洋経済新報社から近刊の予定。

ぶ経済学部は、教授会の頻度が多いことを除けば快適な研究環境だった。この自由な雰囲気の中で以前からの研究計画を引き継ぎ、遅れながらも比較経済研究所の研究叢書一卷をまとめた。

若い学部学生たちと常時接触する機会を持ったのは、なんといっても新鮮な刺激だった。すなわち、日本経済論を講義する必要から、トピックス全般を展望しかつ再学習して自分なりに消化し、学生に伝えるという知的作業を自分に課したことがそのひとつである。第二には、ゼミの学生を含め、若者たちの反応を知り、彼らのもつ最新情報（感性を含めて）に触れ、さらに若いエネルギーを注入して貰った。

この間の3年ほどは、外務省の経済構造調整プログラムの一環としてミャンマーのマクロ経済政策提言作りにも（日本側の「総括者」として）参加する機会があった²⁴。もっともこのプロジェクトの報告書は、その提出（2004年2月）後に政況の変化があり、残念ながらまだ生かされるに至っていないが、アジアの現場で、白紙の状態から経済政策の処方箋を考え、また日本を含む諸国の経済史を改めて振りかえる貴重なチャンスであった。この過程では、開発現場におられる人たちの働きぶりに接することも出来た。

法政の在職中に新たに始めた活動に、御厨 貴氏の誘いを受けて参加した「オーラル・ヒストリー」プロジェクトがある。元来は、政治家の足跡を訪ねて政治史研究の一次資料を収録する目的で（伊藤 隆先生が）始められたアイデアであるが、御厨さんはその対象を政治家以外にも広げようと企画された。それを受けて、経営管理者、技師、労働運動家、科学史家などで注目すべき業績をあげられた方々を（無作為に）選び、お一人数回（少ないときは1～2回、多いときは10回、通常は5～6回）、一回約二時間の聞きとりをして速記録を（編集のうえ）冊子にまとめるのがその内容である。これは資料づくりであって研究そのものではないが、実体験を話して頂くので、刺激を受けたり思考のヒントを得ることがしばしばあった。

24) このきっかけを作ってくださったのは石川先生であった。

VI

2006年から後はどうなるのか、もちろんまだ分からない。しかし、それを占う材料になるかと思われるメモを二種類、下に掲げておこう。

VI-1 企業訪問摘記

社会科学研究の基礎に事象観察があるのはいうまでもない。たとえば新古典派経済学の祖アルフレッド・マーシャルは、20世紀初頭の英国で数多くの生産現場を訪れ、そこでの観察にもとにさまざまな産業組織論的考察を積み重ねている。この事実はまことに心強く、改めてマーシャルに対して敬意を覚えるほどだ。マーシャル経済学の影響力の持続性は、その根底をなすマイクロ経済的観察にその一因があるとすら思わせられるのである。

もっとも筆者の生産現場探訪は、マーシャルに範を得たわけではない。それどころか、漸く近年になって彼の *Industry and Trade* をまじめに読むまで、理論家マーシャルの考察の出発点に生産現場の観察があったという事実を重く認識したことはなかった。

振り返ってみると、筆者が生産現場に関心を抱いたのは、学部学生の頃、どういう理由からだったか沖仲士の労働に興味を覚え、藤林敬三先生にお願いして労働省に紹介して頂いて港湾労働の職業紹介所を訪れ、陸上で作業現場を見学し、また艇に便乗して、沖に停泊中の貨物船での積み込み・積み降ろし作業を観察したことに始まるようだ。その後研究所に籍をおくようになってから、国際文化会館のプログラムによってインドへ渡った時には、カルカッタで機械工場を訪問し、そこで働く生産工程従事者（男性）たちの硬く険しい表情から強い衝撃を受けて、いったいこれはなぜだろうと考えた記憶がある²⁵⁾。

意識して工場見学に携わるようになったのは、梅村又次先生が座長をつとめられた職業訓練政策研究会（労働省職業訓練局長（当時）の私的研究会）に連な

25) この折の訪問記録は、『季刊労働法』95-97号（1975年）に掲載された。

り、しばしば全国各地の職業訓練校や企業付属の訓練施設（学校）を訪れる機会に恵まれてからのことである。多くの貴重なチャンスを設け筆者に新しい知見を授けてくださったのはその頃訓練局課長だった泉 輝孝氏であるが、工場見学の途上、諸先生方との車中会話から得たものも大きかった。なかでも岡本秀昭先生は、しばしば筆者の目を覚ますような言を吐かれた。岩内亮一さん（当時は東工大助手だった）と連れ立って四国の住友化学を訪れ、工場の施設に泊して二日ばかりで生産現場を見学した楽しい思い出もある²⁶⁾。

その後、アジア労働力研究協議会の理事会に連なり、しばしば東南アジアを訪問する機会が生まれてからは、東ならびに東南アジアにおける自動車部品工業発展の実態調査にも携わったので、必然的にこれらの地域の自動車関連工場を訪れる機会が多くなった。当時の筆者は、東南アジアはもちろん自動車の生産管理についてもほとんど無知のところから出発したのであるから、この貴重な「仕事をしながらの学習（on-the-job training, OJT）」機会を作って頂いた石川教授にはお礼の言葉もない。小野氏からは、工学的なものの見方を教わることが多かった²⁷⁾。CAMSの縁もあって1980-81年にフィリピンに滞在した折には、梅村研究会の私設代表を自認して何回か現地の工場を訪問したものだ²⁸⁾。

帰京後、松島 茂氏の肝いりで下請制中小企業研究会を組織してからは、機械工場の現場を訪れることが多くなった。研究会のメンバーと連れ立って長野県の黒田鉄工を訪問したり、小型バスを仕立てて下請機械工場を訪問した楽しい思い出がある。

この頃、日本労働研究機構（現 労働政策研修機構）での研究会（主査 小野 旭氏）に参加した折には、海外技術者研修協会（Association of Overseas Train-

26) この研究会の成果は、「職業訓練計画調査研究会報告書—職業訓練の基本方向」（謄写刷、1970年）としてまとめられた。この折に筆者が参加した工場見学の記録が、尾高煌之助『企業内教育の時代』（岩波書店、1993年）の第4章である。なおこの研究会は、後年、職業訓練の実態調査を施行した。同調査の結果を使った分析は、同上書第5章に収めた。

27) 筆者のCAMSプロジェクトの成果は、Konosuke Odaka, ed., *The Motor Vehicle Industry in Asia: A Study of Ancillary Firm Development*, Singapore: Singapore University Press, 1983とKonosuke Odaka, Keinosuke Ono and Fumihiko Adachi, *The Automobile Industry in Japan: A Study of Ancillary Firm Development*, Tokyo: Kinokuniya Bookstore and Oxford: Oxford University Press, 1988とに結実した。

28) この時の訪問記録（の一部）は、『一橋論叢』（87巻5号、1982年5月）と*Hitotsubashi Journal of Economics*とに掲載されている。

ing Scholarship, AOTS) の骨折りでその卒業生たちを東南アジアに訪ね、以前 CAMS プロジェクトで訪れたことのある企業その他を歴訪して簡単な面接調査をする機会に恵まれたのは幸いだった²⁹⁾。

その後、清川雪彦氏と共同で文部省（当時）の国際共同研究（科学研究費補助金事業）、「日印中小企業の比較研究」を企画した³⁰⁾。この共同プロジェクトの一環としてインドを訪問し、インド成長研究所スタッフの助力のもとに井上雅雄教授と連れ立ってマルチ・スズキの合弁自動車工場、関連自動車部品工場などを歴訪し、関係者から事情聴取した。インドでも、日本的なマネジメントが受容され、高く評価されている側面があるのを知って、正直なところ驚いたものである。

雑用に追われて見学に割ける時間をとれない日々が続いていたが、21世紀に入ってからには縫りが戻った。下請制中小企業研究会の縁で御厨 貴氏に誘われ、経営者や技術者の方々に「仕事の自分史（オーラル・ヒストリー）」を語って頂き、その記録をアーカイブに保存するプロジェクトに連なったからである。その関係で再び生産現場を訪れることもあるようになった。さらに、松島 茂氏らとチームを組んで、松島プロジェクトの工場見学に参加したり、独自のオーラル・ヒストリーを試みたりした。

これらの機会を作って頂いた多数の関係者の方々にはあつく感謝したい。

Ⅶ-2 現代経済学のひとつの課題

次のような議論が二世代ほど前に提示された³¹⁾。

新古典派経済学は、1950-60年代の米国というきわめて限定された社会状況にマッチするような形で形成され、やがて「制度化」された疑似科学である。それは、科学性を謳いながらも実は（カール・ポPPERの意味での）科学ではなく、

29) 日本労働研究機構の報告書『経済社会の国際化と労働問題に関する研究——日本研修と留学の成果をさぐる——』（平成6年11月）は、この時の記録である。

30) この研究成果は、十年以上を経てようやく刊行されようとしている（Odaka and Kiyokawa, eds., *Small and Medium Scale Industry in India and the Model of Japan*, New Delhi: Allied Publishers, forthcoming）。

31) 佐和隆光『経済学とは何だろうか』岩波新書、1982年。

むしろイデオロギーと呼ばれるにふさわしい。

この経済学は、その社会的・歴史的状況との必然的なつながりのゆえに、とりわけアジアの文脈の中へ持ち込まれたときに十分に友好ではあり得ないのは当然である。日本でこれをあたかも「一般的原理 universal principle」であるかの如くに受容し信奉したのは滑稽というほかはない。

いまや科学性が疑われ、有用性も低下して新古典派経済学は、その王座を追われようとしている。しかしこれに代わるべきものは未だ現われぬ。ラディカル派も、マルクス派も、その他の政治経済学も、すべて王座を占め得るほどのものではない。かくて現代経済学は深い混迷の中にあるといわねばならない。

この議論は、新古典派がイデオロギーにすぎないかのような印象を与える。これは行き過ぎである。かつて一部の人びとが信じた（かもしれない）ほど経済学は科学性を有してはいないのはたしかだ。それに、新古典派の経済学にはたしかにアメリカニズムとの融合がある。さらに、米国の大学院教育には弊害もみえる。だがその一方、数量化データを扱うかぎりにおいて、経済現象の実態にかなり意味ある (meaningful) 判断や指針を与え得る分野であるのもたしかな事実である³²⁾。しかも、21世紀初頭になって、いうところの「新古典派経済学」は王座を追われるどころではない。グローバリゼーションや金融工学や市場化などの命題を中心に、ますます隆盛をきわめているのが現状ではなからうか。

だが、その一方で、経済学の「限界」に注意がむけられねばならないのは当然である。経済学が、その隆盛にもかかわらず多くの問題を抱えているのも恐らく事実だからである。しかしその「限界」は、上記の議論が述べているようなイデオロギー性にあるのではなく、むしろその無思想性（あるいは無思想性のポーズ）にこそある。いいかえれば、学問体系そのものが純粹の工学的大系になりきってしまい、それ以上でもそれ以下でもない技術論に終始するケースに近いのではないか。（例えば、オペレーションズ・リサーチとカリニア・プログラミングなどを考えてみればよい。）

32) 仮説が科学的かどうかをきめる一つの必要条件は、それが間違っているかどうか判定され得る (refutable) ということにある。

技術論だから価値がない、と言っているのではない。没価値 (wertfrei) 的だという事実認識を述べたのである。Wert-frei であればこそ、体制にかかわりなく「有用な道具として」通用する。だからこそ、それを道具として用いる人の思想が問われなくてはならないのだ。この意味で、現代の社会科学者の思想がどんなものであるのかが自覚的に問われねばならないだろう。道具が自覚のないまま無思想的に扱われるところにこそ問題がある。

現象的にいえば、現代日本のひとつの問題は、思想の貧困というところにあるのではないか。もしそうならば、思想の貧困は、哲学も貧困を意味する。そこで、さしあたりは、思想について考えることが必要かもしれない。そうすれば、その基をつくる哲学が必然的に育ってくるであろう。

思想について考えるといっても、ありきたりの経済思想史ではつまらない。それならば、長 幸男氏の業績以上にはなり難い (あれだけにするだけでも大変だが)。経済思想もしくは経済政策思想というだけでは十分に歴史性を体现出来ないと思うからである。もう少し根源的なところ、つまり、社会思想とか、組織づくりにかかわる草の根の考え方に繋がる工夫を凝らしたものでなければ面白くない。そのためには、何らかの焦点を設定することが必要であろう。そのためには、考察の中核に、産業選択↔技術選択、中小企業の振興↔前田正名、農本主義・対・工業主義、外資排除の思想、経済的安保、家族主義的経営、職業の意味と経営参加、などといったトピックスを据えることが考えられるのではあるまいか。

My Forty Years in Empirical Economics*

Konosue ODAKA

《Abstract》

The author traces seven major events that had unmistakable impacts on his intellectual development:

(1) His encounter with Professors Henry Rosovsky and Kazushi Ohkawa during his formative years, which sparked his interest in empirical research;

(2) His realization of the indispensable value of modern statistics in empirical research, which was brought to his attention by Professors Saul Hymans and Dale W. Jorgenson;

(3) His discovery of rich information resources from factory visits, first occasioned by a study group on occupational training chaired by Professor Mataji Umemura;

(4) His introduction to the field of economic development, with a special focus on East and Southeast Asia, by Professor Shigeru Ishikawa;

(5) His participation in a newly-formed academic circle of quantitative economic history (QEH), led by Professors Akira Hayami, Takafusa Nakamura, and Shunsaku Nishikawa, among others;

(6) The formation and his participation in an ongoing, database-formation project, entitled Asian Statistical Historical Statistics (ASH-STAT); and

(7) The opening of a fresh intellectual door, through his acquaintance with new colleagues and through his work for the first time on a full-time basis with undergraduate students at Hosei University.

* Followed by a discussion with Professors Yonosuke Hara, Masayoshi Tsurumi and Hideki Esho, and Mr. Haruyuki Shimada.